

# 小ムハンマド



葉山ユタ

## 小ムハンマド

---

ムハンマド、ムハンマド。この国で会った男達に名前を訊くと、大抵ははこう答える。

ムハンマド。

老いも若きも、ムハンマドだ。

近代的な白い街、カサブランカから長距離バスに乗って、この赤茶けた街、マラケシュに着いたのは、昼少し前の事だ。バスターミナルを出た所で、たまたま話しをしたアメリカ人の若いカップルと、タクシーに相乗りしてジャマ・エル・フナ広場までやって来た時、広場はポツカリと黒い地面を空け、その真中で何人かの少年たちが組体操のようなアクロバット芸を見せていた。大きなタンバリンを持った大人の男が、それを見ている観光客に見料を要求している。

観光ガイドの本に載っている、チリチリとベルを鳴らしながら水売って歩く、派手な扮装の老人が二三人、手持ち無沙汰にブラブラしていた。

「毎日がカーニバルだ」

笑いながら言うアメリカの大学生に頷くと、すぐにホテルの客引きが寄ってきた。

一人一泊三百五十円の安宿を見せてもらいに、込み入った路地の奥に在る、ペパーミントグリーンのペンキが剥げかけた木のドアをくぐると、中は意外にきれいな四角い庭で、真ん中にあるタイル貼りの水盤から水を汲んで、太った女が一人洗濯をしていた。その中庭をグルリと囲んで、古いがフランス風の回廊が趣深い二階建ての建物が在る。庭の端に植えられたオレンジの木に、見慣れない鳥が無数に群れて賑やかだった。

周囲を見渡すと、どうやら一階にはオーナーの家族が住んでいて、二階をホテルにしているらしい。狭い石造りの階段を上がり、回廊から中庭を眺めると、水盤の下に貼られたタイル模様が美しかった。

粗末な木のドアを開けて客室を見せてもらおうと、真四角な四畳半ほどの部屋に派手な花柄のカバーを掛けたベッドが一つ置いてあるきりだった。トイレは回廊のどん詰まりに、アラブ式の共同トイレが一つある。

部屋の照明は、壁に穿たれた小さな洗面台の上にくくりつけられた裸電球一つだけだったが、ベッドは清潔で悪くなかったので、一晚寝るだけならこれで充分と前金で一泊分の料金を払った。

前歯の欠けた痩せた小男が渡してくれた部屋の鍵は、形がいびつで針金一本で開いてしまいそうなくらい簡単なものだった。

「貴重品は部屋に置くなよ。じゃあな」

手を振ってアメリカ人達はツインの部屋へ、僕はシングル部屋に入り荷物を下ろした。大した荷物ではない。僕は、着たきりすずめの貧乏旅行者なのだ。貴重品の金とパスポート、帰りの飛行機のチケットは肌身離さない。他に大事な物はコンパクトカメラだけだ。

紙幣と硬貨をジーンズのポケットに幾らか入れ、カメラを持って部屋を出た。緩くなった鍵穴に鉄製の重たい鍵を差し込み、何度か右や左に回してやっと施錠が出来た。階段を下りると、木綿のワンピースを着た十二三歳くらいの少女が近づいてきて、ルームキーと一言云い、僕に向かって手の平を差し出す。

一瞬躊躇したが、洗濯をしている女がニコニコ笑いながらこちらを見ているので、信用してその子に鍵を渡すと、ちょっと微笑んで一階の部屋の奥へ消えていった。この宿の娘なのかもしれない。

季節は冬だが、目の痛くなるような青空から降り注ぐ太陽はチリチリと肌を刺して熱い。しかし、夏並みの暑さと思って薄着で外出すれば、陽が暮れてからの寒さに震え上がることになる。

僕はショートコートの袖を捲り上げ、帰り道に迷わないようホテルの位置を確認しながらジャマ・エル・フナ広場に向かって歩いた。昨日の夕食以来、ペットボトルの水と飴しか口にしていなかったので、すぐにでも何か食べたかった。

広場の周囲には沢山のカフェが軒を並べ、手頃な値段で軽食を食べさせてくれる。タジン、ハリラ、クスクス、カバブにパン、生のオレンジをその場で絞ってくれるフレッシュジュースにコーヒー、ミントティー、コーラ。何でも有る。

僕は広場に入ってすぐの、外壁をピンク色に塗った、二階にテラスのある大きなカフェに入った。重厚な木で出来たテーブル席にすすみ、硬い椅子に座って、サンドイッチとコーラを頼む。

サンドイッチはホテルで出されるような、薄っぺらい上品な物ではなく、丸くて平べったいパンを半分に切り、中を開いてカバブとオリーブ、フライドポテトをギュウギュウに挟んだワイルドな代物だった。

タジンは塩味が足りないしクスクスは苦手だが、この国の食べ物は大概旨かった。何よりパンが旨かった。

カフェの窓から広場が見える。ジャマ・エル・フナとは「死者たち」という意味である。だからジャマ・エル・フナ広場は死者たちの広場であり、昔はここで公開処刑などが行われていたそうだ。それも今は昔、日が暮れると広場いっぱい食べ物屋の屋台が並び、欧米の観光客でごった返すのだが、昼間はいたってのんびりしている。

僕は熱々の焼いた羊肉が詰まったサンドイッチをコーラで流しこむように食べ終わると、さっさと席を立って広場の見物に出かけた。

広場のはじの方には、敷物を敷いて座り込み、市場さながらに露店を出している人達がたくさんいるのだ。頭から大きなスカーフを被り、背中を丸めて小さくなった老女が、カラフルな敷物の上で忙しく編み棒を動かしている。彼女の前には、模様を編み込んだ半円形の毛糸の帽子が山と積まれ、時折観光客がそれを摘まんで値段を聞いている。ミツバチがたかるほど甘い砂糖菓子を売っている老人や、輪投げのようなゲームで稼ぐものもいる。エキゾチックな祭りの縁日のようで、一日見ても飽きる気がしない。

僕が広場の露店を冷やかしながら歩いていると、ふと後ろに人の気配を感じて振り向いた。すると僕の後ろには、五六歳から十二三歳くらいまでの子どもが数人、物珍しげな顔をして立っていた。いつの間にか僕は、ブレーメンの音楽隊かハーメルンの笛吹き男のように子ども達を引き連れて歩いていたらしい。東洋人が珍しいのだろう。

子ども達はみなカフェオレ色の肌をして、痩せていて、大きな黒い瞳に長い睫毛が可愛らしかった。写真でも取らせて貰おうかと思い、コートのポケットの中のカメラに手を伸ばすと、一斉に子ども達が手の平を上にしてこちらに突き出し、僕の周りを取り囲んだ。

ああ、何かくれると思ったんだ。

僕は慌ててもう片方のポケットに手を突っ込んだ。運が良いのか悪いのか、日本から持ってきたのだ餡の袋が入っていた。僕はその袋から餡を取り出し、一個ずつ小さな手の平に乗せてあげた。女の子達は喜んでキャッキヤとはしゃいだが、七八歳の生意気そうな顔をした男の子が、餡を握った方とは別の手を突き出して「ワン デイルハム」と鋭い口調で言った。金をくれと言うのだ。

僕はノーノーと邪険に断り、知らん顔して再び露店を見て回った。水やお菓子ならいいが、大勢の前で金を上げるととんでもない事になる。噂を聞きつけて、すぐに数が増える、ずっと付いて来られる、貰えなかった子と喧嘩が始まる。

子供だからと言って油断は出来ない。彼らをスリの手先に使う、悪い人間も多いと聞く。

子ども達の中で一番年長そうな少年が、さっと僕の前に回って自分の胸元を親指で指さし、真剣な顔で言った。

「ムッシュー、ガイド、ガイド」

そして僕のコートのポケットを指さし、しっかり手で抑えてガードしろと身振りで忠告してくれた。

痩せてヒョロヒョロした線の細い、ウェーブした短い黒髪が頭に貼り付いた、利発そうな顔をした少年だった。チェックのネルシャツの上ですり切れたグリーンの子セーターを着て、下は紺のジャージに古ぼけたスニーカーだ。

この子達は学校に行っているのだろうか？ 毎日、ここで商売をしているのだろうか？

旅行者の勝手な詮索も知らず、彼は屈託なく質問してきた。

「ムッシュー、シノワ？」

「ノン ジャポネ」

「イングリッシュ？ フランセ？」

「イングリッシュ プリーズ」

「オーケー、オーケー、僕は良いガイド」

「英語、話せるのか？」

「少し。スペイン語、ドイツ語少し、フランス語沢山」

「偉いな」

へへ、と嬉しそうに笑う。

「お土産買う？ 革のカバン、スチールの皿、カーペットも有るよ」

「土産は必要ないよ。観光したいのさ」

「アーティスト見る？ スーク（市場）は面白いよ。付いて来て」

僕はこの小さなガイドに付いて、広場のすぐ近くにあるスークまで行ってみることにした。どうせ広場に灯がともるまで数時間あるのだから都合が良い。いかにもイスラムという造形の大きなアーチ型の門をくぐり、土産屋や工房のひしめくスークへ足を踏み入れると、雑踏の中、獣じみた匂いがムツと鼻をついた。

少年と一緒にいた子ども達はいつの間にか消えていた。

地元の人達も利用する市場なので、狭い通路を人を押しのけ馬車が通る。背中いっぱい荷物積んだ口バもポクポク歩く。口バの大きな濡れた黒い眼は、可愛らしく悲しげだった。

口バの写真を撮ろうとカメラを取り出してファインダーを覗くと、口バを引いた老人が咎めるように首を

横に振ったので、僕はシャッターを押すのを諦めてカメラをしまった。

僕は小ガイドに連れられて、色々な店を覗いて周った。金属の皿に細かい幾何学模様を延々と彫り続ける若者の手仕事を見せて貰ったり、カーペット屋の店先で、店主の蘊蓄を聞かせて貰いもした。

どこの店の店主も、必ずどれか欲しいものは無いかと訊くのだが、貧乏旅行はまだしばらく続くし、荷物を増やしたくない僕は、もう少し周って見るよとやんわり断った。

「気にしないで、モロッコを楽しんで、ジャッキー・チェン！」

買い物を断ったからといって、嫌な顔をされる事はなかった。どの店主も愛想よく僕に挨拶し、小さなガイドは、また張り切って僕を他の店へと案内した。この子もまた、僕が何も買わないからといって不機嫌になることはなかった。

遠いアジアからやってきた、右も左も分からない観光客に、この街の面白い所を見せてやる事が楽しいと言った様子だ。とは言え、僕は、この子の一生懸命さに何か報いなければ申し訳ないような気がしてきた。

多分、案内された店で品物を買えば、後で店からバックマージンが入るのだろうが、直接本人に小遣いをあげた方が実入りが良いだろうと考えた僕は、二時間ほどバザールの中を見物し、再び広場入口の門まで戻った所で、ジーンズのポケットから、小さく畳まれた一番小額の紙幣を目立たないように、そっと彼に手渡した。

「ガイドありがとう。チップだ」

少年が嬉しさと困惑をないまぜにしたような表情で僕を見上げた時、すぐ近くで雑貨か何かを売っている店の男が、いきり立った顔で僕らの方に向かって歩いて来た。

何だろうと、その屈強そうな男の髭面を見つめていると、彼はものも言わず、いきなりその大きな右の手で少年の横っ面を張り倒した。少年は一瞬よろけて倒れそうになったが、ぎりぎり体勢を立て直すと脱兎の如く走りだし、バザールの雑踏の中へ逃げて行った。

「.....ちょっと、あんた」

僕が抗議をしようと口を開くと、その男は目を怒りでギラギラさせて僕の方に近づき、片言の英語で低く、はっきりと言った。

「バッド ボーイ！ ガイド ノー！！」

そして罵るように何かをつぶやきながら、店の方に戻って行った。

目の前で、誰かが殴られるのを見るのは辛い。そして、誰かに殴られる姿を、知った人に見られるのも辛いだろうと思う。しかし、誰かに殴られる所を、知った人に見られて辛いだろうと、その人に気の毒に思われているのを知るのも辛いに違いない。だから僕は、あの子に同情しない。そうすれば彼の辛さが一つ減ることになるから。

さっきまでの楽しい気分が、すっかり吹き飛んでしまい、僕は悄然としてその場を離れた。

日陰を選びながら外壁に沿ってしばらく歩くと、カフェの外にテーブル席が幾つか並べられているのを見つけたので、僕はその席の一つで休憩することにした。

周りには、欧米からの観光客が三々五々休んでいる。その中にいる年配の女性の一人が、暑さに負けてジャケットを脱ぎ、ピンクの半袖シャツ姿になった。その白い二の腕には、遠目でも分るくらい無数のそばかすが散っている。

僕は顔にうっすらにじんだ汗を手で拭き、ポケットからカメラを出して閑散としている広場の写真を撮った。

あの子は、きっと正規のガイドたちから見れば、ショ場を荒らす害獣なのだろう。何かの専門家でもない、ただの観光客にしてみれば、目つきの悪い髭面の男より、可愛らしい少年や少女に道案内してもらった方が楽しいし、僅かなチップで喜んでくれるのを見れば嬉しいに決まってる。子供と言ってもあなどれない存在に違いない。

あの男の容赦の無い暴力は嫌悪するが、僕は義憤を燃やしたり、この国の子ども達に同情はしない。あの子達は「可哀想な子ども」ではない。自分の国の常識を、そのまま他国に当てはめるのは短絡だ。

そんな事をぼんやり考えていると、カフェのボーイが注文を取りにやってきた。僕は、空腹を抱えて昼まで耐えた経験を踏まえ、持ち帰り用にペットボトルのミネラルウォーターを一本と、ホブズという丸パンを一個、そして喉を潤す為にミントティーを一杯頼んだ。

テーブルに運ばれてきた長めのグラスには、切ったばかりかと思われるミントの葉が、グラスからはみ出すほどにぎっしり詰め込まれ、白砂糖の塊が幾つか入れてある。

これに、ポットから熱い緑茶をなみなみと注ぐのだが、緑茶の渋みに飽和状態かと思われるほどの砂糖の甘みが強烈で、そこに夏の草むしり後のような青臭さが加わり、最後に、かすかなミントの香りが鼻に抜けてゆくという、南の国らしい個性的な飲み物である。

正直言って、ミントティーよりフランス風のコーヒーの方が美味しいのだが、暑気払いと時間潰しには、小さなコップに入った濃いコーヒーより、グラス一杯の熱いミントティーの方が向いていると思う。

店員が、裸のままのパンとミネラルウォーターのボトルをテーブルの上に置いて行った。頼めば紙袋くらいくれるのかもしれないが、言葉が分からないので仕方無い。

丸パンは直径が二十センチくらいあり、そのまま裸で持ち歩くのは不都合なので、僕は手で半分に分り、ポケットから大判のバンダナを出してそれで包むことにした。

大体等分に割ってから、一方の端をちぎって味見をしてみると、やっぱり旨い。適度な塩味といい、絶妙の弾力といい、何しろ旨いのだ。これが熱々の焼きたての時に、バターを塗って食べたら最高だと思う。

僕がちぎったパンを片手にミントティーを舐めるように飲んでいると、十歳くらいの汚れた服を着た少年が、おびえたような目をして僕のテーブルに近づいてきた。そして現地の言葉で二言三言何かつぶやき、細い腕をだるそうに持ち上げ、僕の食べているパンを指差した。

僕は無言でうなずき、手に持っていたパンの切れはしを彼に差し出したが、彼は驚くほどの素早さでテーブルの上に置いておいた、大きな方のパンの塊を引っ掴むと、猛スピードで駆け去ってしまった。

あっけに取られるとは、まさにこの事。

僕が口を開けたままポカンとしていると、近くのテーブルでだべっていた中年の白人グループが、僕の方を見て手を叩いて笑っている。

そうだ、こんなのは笑い話なのだ。少なくとも怒るようなことではない。同情も無用だ。

僕は苦笑しながら、これ以上テーブルの上の物を攫われないよう、半分残ったパンをバンダナで丁寧に包んでコートポケットに突っ込み、水のペットボトルは片手でずっと握っていることにした。

日暮れまで、まだ一二時間ある。夜はこのジャマ・エル・フナ広場の屋台でカバブでも食べたいし、一度ホテルに戻ろうかと考えていると、また近くに人の気配を感じた。

いささか警戒して振り向くと、あの素人ガイドの少年が、左目の周りを黒ずんだ紫色に腫らして、すぐ側に立っていた。今日、彼と一緒に飴をあげた子ども達も二三人、少し離れた所に立ってこっちを見つめている。

「ムッシュー、僕ガイドするよ」

見ているこちらが目眩を起こしそうな痛々しい顔に、屈託の無い笑みを浮かべ、か細い右手の親指を立てて見せた。こういう所で生きる子ども達は、早く大人にならなければ生きていけない。僕の国の子ども達とは違うのだ。

「タフだなあ」

手の甲で、そっと少年の腫れた頬に触れると、恥ずかしげに、濃く長い睫毛を伏せた。

僕はシャツの胸ポケットに入れていたセブンスターのパッケージを取り出し、戯れに一本引き出して彼に勧めてみた。

「吸うかい？」

「メルシ」

彼は遠慮なくそれを一本取って口にくわえた。僕が使い捨てライターでタバコの先に火を付けてやると、片手を上げて風を防ぎ、一度強く吸い込んでからフーっと勢いよく煙を吐き出した。

まるで二十年もタバコを吸っているような慣れた手つきで、彼はタバコを人差し指と中指の間に挟んで持っている。

手の平を上にして少しすぼめ、フィルターは外側に、赤く燃える方を内側にして。まるでハンフリー・ポガードだ。

「ねえ、次は何処に行くの？」

「フェズだ」

「列車で？ ムッシュー、ガイジンが駅で切符を買うの大変だよ。ここから駅までは結構遠いし、当日、駅に行ったら切符は買えないよ。僕がひとつ走り駅まで行って、切符を買ってきてやるよ。ムッシューは友達だから手伝いたいんだ」

僕もタバコを一本口にくわえて火を付けた。

「ホントか？ 明日の午後発のが欲しいんだけど」

「大丈夫！任せてよ」

そうして周りを見廻し、少しだけ苦い顔をして声を落とした。

「切符代を僕に預けてくれれば……買ってきてあげる」

タバコを口にくわえ直し、そっと右手の人差し指と親指をこすり合わせる仕草をする。急に、抜け目ない大人の男の顔になる。

僕はカサブランカ行きの切符の値段を予め調べて知っていたので、それより少し余るくらいの紙幣をポケットから出してテーブルに置いた。この札は、どれも傷んでくしゃくしゃで、その上変な匂いが染み着いている。

「バスでも乗れよ。明日、あまり遅くない午後の便で、フェズ行きの一等席を一枚頼む、ムハンマド」

僕がそう言うと、彼はちょっとびっくりした顔をしながらテーブルの上のくたびれた札を手を取った。

「お前の名前、ムハンマドだろ？」

彼の不思議そうな顔が、パッと弾けて笑顔になった。素の、あどけない少年の笑顔だった。

「そう！ 僕の名前はムハンマドって言うんだ」

彼が勢いよく駆け出すと、一緒にいた幼い子ども達も彼を追って駆け出し、あっという間に雑踏に消えた。

ムハンマドと入れ替わるように僕の側に立ったのは、茶褐色の顔におびただしい皺を刻んだ優しげな老人で、身に付けている灰色の地に茶の縦縞のジュラバは、叩けばもうもうと砂埃が舞いそうな汚れ具合だった。

彼は赤いトルコ帽を被った胡麻塩頭を傾げ、枯れ枝のような茶色の指で僕のタバコを指さして、口元に持って行く仕草をする。

僕は合点してタバコを一本抜いて手渡し、火を付けてやろうとライターを差し出したが、彼はそれを手で遮ってニコニコ笑い、大事そうにタバコを持って去って行った。

ここではタバコでもパンでも、分けて欲しいと言う人には分けてあげればいいのか。

広場は突然、小型トラックや大荷物を抱えた男達でごった返し始めた。

屋台が店を広げる時間になったのだ。僕はカフェの椅子にもたれ、甘ったるいミントティーをすすりながらその様子を眺めた。

屋台が組み立てられ、ベンチが並び、どこかから電線を引っ張ってきてライトが吊るされる。ふいに業者同士の諍いが起こった。大げさな身振りと大声でのやり取りは、まるで舞台劇を見るようだ。

遠くクトオビアの塔の向こうに夕日が沈み始め、そのミナレットは黒いシルエットとなって茜色の空をバックに聳えている。夜になれば、街頭のスピーカーからコーランの詠唱が流れるだろう。

それまでにムハンマドは戻ってくるだろうか？

戻ってくるだろう。彼は痩せた細い腕を振り回し、お伴の子ども達を引き連れて駈けてくるだろう。そして誇らしげに僕に切符を差し出すのだ。何と言ってもガイドは信用が第一だ。

一番に出来上がった屋台の方から白い煙が上がり、羊肉の焼ける良い匂いが漂ってきた。



モロッコ マラケシュ  
ジャマ・エル・フナ広場から見るクトゥビアの塔

撮影 葉山ユタ

小ムハンマド

<http://p.booklog.jp/book/47676>

著者：葉山ユタ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hayamayuta/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/47676>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/47676>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社 paperboy&co.

2012年4月2日発行